

斑点米カメムシ類の発生増加に注意!!

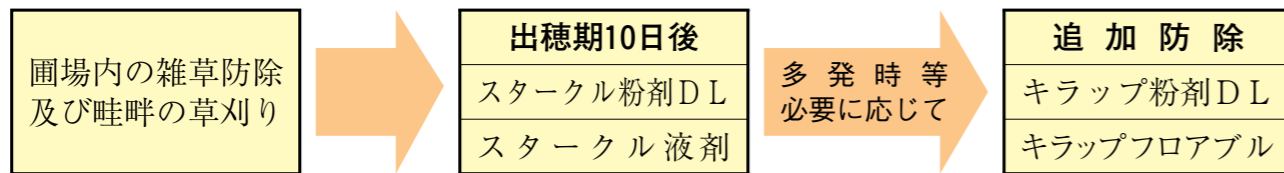
～昨年引き続きアカスジカスミカメの発生に注意が必要です。～

斑点米カメムシ発生予想 平成24年7月12日発表
秋田県病害虫防除所（防除対策情報No.2より）

病害虫防除所が行った抽出ほ場調査におけるアカスジカスミカメのすくい取り数は県南部で平均1.5頭（全県平均1.1頭）と昨年並みでしたが、発生地点率は21.1%（全県平均11.7%）と高くなっています。

今後の気象予報からも斑点米カメムシ類の発育に好適な環境が続くと見込まれていますので、イネの生長に合わせ、適期の防除を行います。アカスジカスミカメは登熟後半まで加害することがあるので今後の予察に注意しましょう。

斑点米カメムシ類防除体系



- おばこ一斉草刈りデー（7月25日まで）以降は9月上旬まで草刈り禁止期間となっています。
- 出穂10～15日までに草刈りを終えることが出来なかった場合など、やむを得ず草刈りをする時は必ず畦畔を含む水田全面に斑点米カメムシ類対象の殺虫剤（下記薬剤）を茎葉散布した後に草刈りをしてください。
- 周辺より出穂の早いほ場では斑点米カメムシ類が集まりやすいので、出穂期に合わせて防除時期を調整しましょう。
- 水田内にホタルイ類のカヤツリグサ科雑草やノビエが多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入を助長するため、水田内の除草を徹底します。除草剤の散布にあたっては、使用時期に注意する。

◎農薬適正使用基準

散布時期	薬剤名	希釈倍率／散布量 (10a)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
出穂期10日後頃	スタークル粉剤DL	3kg	収穫7日前まで	3回以内
	スタークル粒剤	3kg		
	スタークル液剤	1,000倍／60～150 μ l		
追加防除 1回目散布の14日後頃	キラップ粉剤DL	3～4kg	収穫14日前まで	2回以内
	キラップフロアブル	1,000～2,000倍／60～200 μ l		



アカスジカスミカメ
特徴：体長5～6mm、背側中央部に橙赤色の太い縦線がある



アカヒゲホソミドリカスミカメ
特徴：体長5～6mm、幅1mmで細長く触角・足が淡赤色



オオトゲシラホシカメムシ
特徴：体長6～7mm、背側全体が灰褐色で白色の斑点があり、肩の辺りにトゲがある



農業技術情報

No. 5

平成24年8月発行



発行／秋田おばこ農業協同組合
仙北農業共済組合

監修／仙北地域振興局農業振興普及課

草丈短く、茎数が多い

～ほ場により生育差があるため、今後の管理を徹底しましょう～

水稻定点調査結果 7月25日現在（仙北地域振興局農林部農業振興普及課）

7月25日調査の「あきたこまち」の生育は、草丈68.2cm（昨年比92%）、茎数536本/m²（昨年比116%）、葉数11.5葉（昨年差-0.6葉）、葉色37.6（昨年比100%）となっています。草丈は短く、茎数は多く、葉色は昨年並、葉数は少なくなっています。

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	SPAD (葉色値)
本年値	68.2	536	11.5	37.6
昨年値	73.8	463	12.2	37.5
昨年比	92%	116%	-0.6	100%
前年値	75.4	428	12.1	34.5
前年比	90%	125%	-0.6	109%

倒伏の注意点

幼穂形成期及び減数分裂期の生育調査結果より、節間長が長く生長し、倒伏の可能性が高いと判断された場合は、倒伏軽減剤の使用を検討します。

使用時期	薬剤名	10aあたり使用量	使用回数	使用方法
出穂10～5日前	ビビフル粉剤DL	3～4kg	1回	茎葉散布
出穂10～2日前	ビビフルフロアブル	75～100ml、散布量50～150 μ l	〃	〃

※上記薬剤は多量散布や重複散布に特に注意する。

【倒伏注意の目安】

- ① 減分期の草丈が75cm以上（12葉の葉身長が40cm以上、葉鞘長が35cm以上）
- ② 第5節間が4～5cm以上、第4節間が9～10cm以上、合計で13～15cm以上

積算気温からみた出穂期の予測

移植日 (中苗)	7月26日以降の天気		
	-2℃	±0℃	+2℃
5月15日	8月4日	8月3日	8月2日
5月20日	8月6日	8月5日	8月4日
5月25日	8月9日	8月8日	8月6日
5月30日	8月12日	8月10日	8月9日

※アメダス大曲データより



園芸施設共済 台風シーズン到来!今すぐご加入を!



注意
台風の進路が発表されたときなどの
かけ込み加入はできません。

参考)4間×10間のハウス
28万9千円の補償金額
掛金は6,573円(12ヶ月)です

いもち病対策 早期発見・早期防除が決め手になります。

・県南地区のいもち病の発生時期は平年並と見られますが、圃場巡回等でもいもち病の病斑が確認された場合は、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤等）の茎葉散布を行います。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布します。

～穂いもち対策について～

・周辺の発生田からの伝染の影響がない場合は防除の必要はありませんが、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合などは、出穂期～7日後にラブサイド剤で防除します。
葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂直前と穂揃い期にラブサイド剤またはビーム剤の茎葉散布を行ってください。

散布のポイント	薬 剤 名	希釈倍率／散布量 (10 a)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
予 防 剤 と 治療剤の混合剤	ブラシン粉剤 D L	3～4 kg	収穫21日前まで	2回以内
	ブラシンフロアブル	1,000倍／100 ^{リットル}		
出穂直前と 穂揃期の2回 ※多発時は傾穂 期に追加防除	ラブサイド粉剤 D L	3～4 kg	収穫7日前まで	3回以内
	ビーム粉剤 D L			
	ラブサイドフロアブル	1,000倍／－		
	ビームゾル	1,000倍／－		

※ラブサイド剤の成分（フサライド）、ビーム剤の成分（トリシクラゾール）の本田での総使用回数は3回以内なので注意する。
※ビームゾルは傾穂期以降に散布すると薬害を生じることがある。

紋枯病対策

農作物病害虫発生予察情報第4号（H24.6.28秋田県病害虫防除所）によると、紋枯病は「やや多い」と予報されています。

・紋枯病の防除は出穂直前～出穂期がもっとも防除効果が高い時期です。
出穂直前以降に使える薬剤は次のとおりです。

散布時期	薬 剤 名	粉	液	水	フ	希釈倍率／散布量 (10 a)	備 考
出穂直前 ～穂揃期	バリダシン	○	○			液剤150L 1,000倍	ア) 出穂直前の防除に重点をおく イ) 多発が予想される場合は出穂 以降にも散布する ウ) 粉剤の施用量は3～4 kg/10 a
	モンカット	○		○	○	水和剤・フロアブル 1,000倍	
	モンセレン	○			○	フロアブル 1,500倍	

注) 粉：粉剤DL、液：液剤、水：水和剤、フ：フロアブル

注) いもち病防除で嵐プリンス箱粒剤6（50g/箱または25g/箱）あるいは嵐ダントツ箱粒剤（25g/箱）を使用した場合、紋枯病の防除も兼ねる。



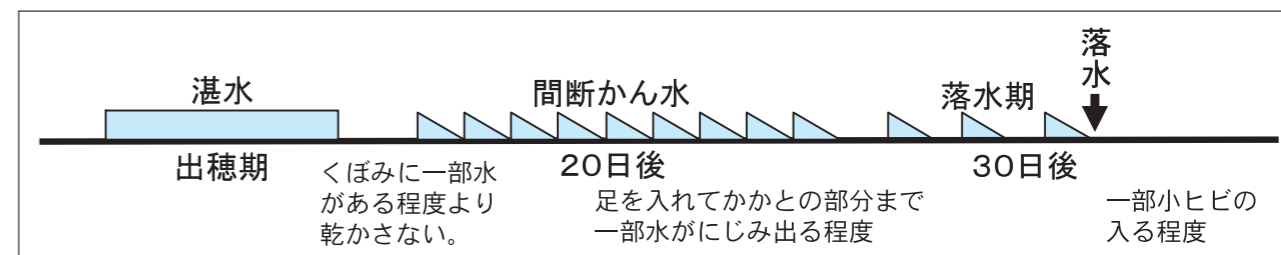
↑初期の病斑：はじめは下部の方に現われる。



↑病勢のはげしいとき：病斑は暗緑色か蒼白色。急いで防除する。

出穂後の水管理について

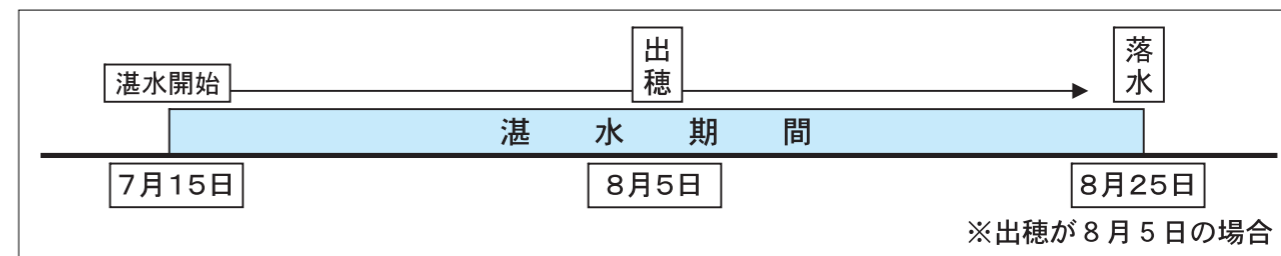
- ① 出穂当初は水を多く必要とする時期なので、出穂後10日間は5～6cm程度の水深で湛水します。その後は2～3cmの浅水、間断かん水とします（下図参照）。
- ② 落水の時期は、概ね出穂30日後とします。早期に落水すると葉色の低下、枯れ上がり、根の機能減退により登熟が妨げられ収量、品質、食味が低下する場合がありますので注意してください。
- ③ 根の機能減退を防止するため、気温が30℃以上になる日は、夜間のかん水、日中は落水し、地温を下げます。（かけ流しは水不足の一因になります）。
- ④ フェーンなど乾燥した風が強く吹送する場合は湛水にします。
（※昨年同様、登熟期に乾いた強風が吹くと予想される場合は特に注意が必要です）



カドミウム対策

・カドミウム濃度が0.4ppmを超える米を流通させると食品衛生法違反となります。汚染米を生産・流通させないように水管理を徹底しましょう。

○カドミウムを根に吸収させないためには出穂前3週間、出穂後3週間の計6週間で常時水を張り、田面が空気に触れないようにします（田面が露出すると土壌が酸化し、カドミウムが吸収されやすくなります）。



フタオビコヤガ対策

フタオビコヤガは多肥田や葉色の濃い水田で集中加害を受ける場合があります。7月下旬以降に発生するフタオビコヤガは第3世代であり、発生が多く見られる場合は以下の剤で防除しましょう。

薬 剤 名	希釈倍率・散布量(10 a)	散 布 時 期	散布方法
トレボン粉剤 D L	3 kg	第3世代 8月上旬	茎葉散布
MR. ジョーカーEW	2,000倍・100 ^{リットル}		



フタオビコヤガの成虫



フタオビコヤガの幼虫



後期被害葉
(階段状に食害)